

心理学評論

投稿・執筆の規定

心理学評論刊行会
(2013年)

はじめに

1. 『心理学評論』刊行の目的

本誌は、心理学とその関連領域の研究者、およびこの方面に関心をもつ人々に、自由な研究討論の場を提供することによって、心理学および関連科学の発展に寄与することを目的として、1957（昭和32）年に創刊された。以来、創刊号を Vol. 1 とし、現在にいたるまで継続して刊行されている。

本誌は広い立場からの理論的考察や展望を中心とした学術論文から構成されている。また、学会の機関誌ではないため、学会という組織の制約を受けず、人々に自由な討論の場を提供しようという重要な意義をもっている。

2. 刊行物の概要

論文は、広く学際的な視野の広がりをもつ心理学のレビュー（評論）を特徴としている。本誌の内容は、任意のテーマについての一般投稿論文と、特定のテーマについて編集委員が企画し執筆を依頼した特集論文からなり、自由テーマの一般号と特集号とを各2号ずつ、合わせて年4回刊行している。

いずれの論文も、単に一つの観察や実験などの研究成果を発表するのではなく、それらを踏まえたより広い立場からの理論的考察や展望、さらに既発表論文に対する批判や討論などの質の高い内容が望まれる。そのため、一般投稿論文掲載の可否については、複数の審査者による慎重な評価に基づいて編集委員会が決定している。

Vol. 40からは判型を大型化し、カラー印刷の導入、データベースの更新に努め、キーワードによる論文名、執筆者名の検索もできるようになっている。

3. 本誌への投稿

先に述べたように、本誌は学会誌ではないため、投稿者の資格に制限はない。自由なテーマでの多様な論文の投稿が望まれている。

投稿にあたっては、次の「投稿規定」、「執筆規定」、「投稿から掲載まで」を参照されたい。

4. 著作権

刊行後の著作権は心理学評論刊行会に属する。

投稿規定

1. 論文は未発表のものであることを原則とする。
2. 論文は、単に一つの観察、実験などの研究の発表を主目的とするものでなく、
 - (1) それらを踏まえたより広い立場からの理論的考察
 - (2) 理論的展望、総説
 - (3) すでに発表された論文に対する批判、討論
 - (4) 各専門あるいは境界領域活動の現状と評価などを内容とするものが望まれる。
3. 投稿者の資格に制限はない。投稿論文の掲載の可否は、学問的価値の観点から編集委員会の責任において決定される。
4. 論文の長さは原則として本誌 20 ページ以内（図表などを全て含む）とし、超過する場合も、長さは 25 ページ前後までとする。超過分は、投稿論文の場合執筆者の自己負担とする。詳しくは「執筆規定」の項を参照のこと。
5. 編集の都合上、執筆者の了解のもとに、文意を損なわぬ範囲内で字句の修正、図表の体裁の改変などを行うことがある。
6. 英文要約は投稿前に出来るだけネイティブスピーカーの校閲を受けること。
7. 図表等を他文献から引用する場合は、掲載が決定したのち、原著者および出版社の許可を得ること。
8. 著者には、本誌 1 部、および、論文 1 篇につき抜刷 20 部を贈呈する。それ以上の部数を必要とする場合は著者の実費負担とする。希望者には論文 PDF を贈呈する。
9. 執筆の際は、次ページ以降の「執筆規定」に従うこと。
10. 投稿する際は、最後にある「投稿から掲載まで」を参照のこと。

執筆規定

論文はワープロを用いて作成すること。手書きの原稿は受け付けない。

1. 一般的な注意事項

1.1 用紙の設定

A4判の用紙を縦長に使用し、文字は10.5ポイントあるいはそれ以上の大きさにして、各ページ30字×20行に印字する。行間は1行以上あけ、用紙の上下左右に十分な余白を残す（付録2・3参照）。

1.2 論文の長さ

原則として、論文の長さは本誌20ページ以内（英文要約、図表、文献、付録等すべてを含めて）とする。A4判の用紙に1ページ600字で印字した場合には、およそ63枚に相当する。この限度を超過する場合にも、25ページ前後まで（同じく、およそ80枚相当）を限度とする。ただし、特集号の論文で、編集担当委員が必要と認めた場合はこの限りではない。各自でページ概算をする場合には、本誌1ページを1900字として計算するとよい。

1.3 英文要約およびキーワード

英文要約は、100～180語とし、12ポイント程度の大きさに印字するのが望ましい。要約には、5～6個のキーワードをつけておく（付録1参照）。また、投稿前に出来るだけネイティブスピーカーの校閲を受けておくこと。なお、日本語による要旨には、英語キーワードに対応した日本語キーワードをつけておく。

1.4 添付票

原稿には必ず、次の各事項を記入した添付票をつける（付録4参照）。

- (1) 表題：日本語表記およびその英訳
- (2) 欄外略題：著者の姓を含めて20字以内が望ましい。
- (3) 著者名：氏名およびそのローマ字表記
- (4) 出身学校：大学卒業以降について記し、それぞれに西暦年をつける。
- (5) 所属機関：機関名、その英語表記、職名・身分、機関の所在地、電話・FAX番号、電子メールアドレス
- (6) 現住所：電話・携帯電話・FAX番号、電子メールアドレスがあればつける。
- (7) 連絡先の指定：所属機関あるいは現住所のいずれか一方
- (8) 原稿枚数：図・表および日本語による要旨を除いた数
- (9) 図（うち、カラーがあればその図番号）・表・付録の数
- (10) 脚注の数
- (11) 引用文献の数

- (12) 英文要約の語数（100～180語）と日本語による要旨の枚数
- (13) キーワード：英語及び日本語（5～6個）
- (14) 論文の分野：次の中から選択のこと（複数可）。知覚・記憶・注意・学習・認知・発達・動物・生理・脳・健康・教育・社会・臨床・人格・ジェンダー・犯罪・産業・文化・方法・原理・歴史
- (15) 論文（最初の原稿）送付日
注：著者が複数の場合は，(3)，(4)，(5)，(6)はすべてについて記入する。
- (16) 使用ワープロ：OS（WindowsあるいはMac，該当するものに○をつけその名称を記入）
ワープロ（名称，バージョン）

2. 原稿の作成

2.1 文字

文字は常用漢字，現代かなづかいを原則とする。

2.2 欧語

本文中には，以下の場合を除き，原則として欧語を用いない。特に名詞（熟語も含む）以外の言葉はこなし適切な日本語表記にすることが望ましい。

- (1) 欧文文献の著者名，欧文書籍・雑誌名
- (2) 外国人名。なお，特定の文献をあげないときには，初出時に，W. Jamesのようにイニシアルをつけておく。
- (3) 欧語術語を本文中で用いるのは望ましいことではないが，特に欧語での表現を明示しておきたい場合や，必要な場合にのみ，初出の日本語表現の後ろに（ ）をつけて欧語を示しておく。たとえば，系列学習（**serial learning**）のように書く。ただし，日本語の定訳がない場合には，欧語を使うことができる。
- (4) 次項（2.3，2.4，2.5）に示すもの

2.3 略語

専門用語の略語を用いるときには，初出時に欧語のフルスペルを書き，後ろに略語を示す。たとえば，短期記憶（**short-term memory**：STM）のように書き，以後本文中に略号を使うことができる。なお，略号には大文字を用いる。

2.4 イタリック体

次のものはイタリックとする。原稿の当該箇所に下線を入れイタリックであることを明示しておく。（ ）内に例を示す。

- (1) 欧文書籍の表題と欧文雑誌の名称，巻（Vol.）数字
(Handbook of psycholinguistics ; Psychological Review, 102)
- (2) 数式中の数を表す文字 (*i, j*)

(3) 数値や量を表す文字（報酬の量 R , 遅延時間 D , 報酬の価値 V ）

(4) 統計法に用いられる記号（ SD , F , t , p , df , r ）

(5) 動植物のラテン語学名，特殊な術語（*Phaseolus vulgaris*）

2.5 特殊な文字

ギリシア文字など，特殊な文字の場合は指定しておく。また，アクセントやウムラウトなどのつく欧字も印を付けて注意を促しておくことが望ましい。

2.6 カタカナ

動物名，植物名などは原則としてカタカナで書き，必要な場合には原名，学名を（ ）に入れる。また，外国語，外国国名，外国地名は原則としてカタカナで書く。

アカゲザル (rhesus monkey)

ニホンザル (*Macaca fuscata*)

2.7 数字

数字は，原則としてアラビア数字を用いる。ただし，「二者択一」などの熟語の場合は漢数字を用いる。一つと 1 つ，二次元と 2 次元等については，執筆者の選択に任せられているが，同一論文内で混用しないように心がける。

2.8 脚注

注はできるだけ避けること。その内容をこなして本文中に組み入れることが望ましい。やむをえず注を入れることが必要なときは脚注とし，冗長にならないようにして，本文中の対応箇所を通し番号によって明示する。

2.9 図表

図表には，図表番号，表題，および簡潔な説明をつける。

2.9.1 図表の番号

番号は，図 1，表 1 などとする。写真も図と同じ取り扱いになるので，番号を通してつける。図表の表題および説明に英文を用いてもよいが，その場合，図表の番号は Figure 1, Table 1 などとする。ただし，1 論文中に和文，英文を混在させてはならない。

2.9.2 図表の位置

図表の挿入位置は原稿横の余白または原稿中の空白に図表番号で示す。

2.9.3 引用図表

引用図表には著者名と年号を明記する。また，それをもとに著者が改変した場合明記すること。例えば，(Funahashi et al., 1997)，(Fries et al., 2001 より改変)，(Johnson et al., 1990 をもとに作図) 等。

2.9.4 作成上の注意

図表は細部までわかるよう明瞭に作成する。本誌の欄内に収まるように，大きさ，形，字数などを調整すること。文字の大きさには特に注意する。

2.9.5 他文献からの引用

文献の原著者および出版社の許可を得ること（掲載が決定してからでよい）。

2.9.6 カラーの図

一般投稿論文の図は原則としてモノクロとし、もしカラーとする場合は実費を負担する。

3. 引用

文献の引用に関してはアメリカ心理学会（APA）のスタイルに準拠する。詳細は同学会発行の最新の *Publication Manual* を参照されたい。あるいは最近の『心理学評論』に掲載された論文を参考にし、その方式どおりに文献を表記すること。

以下に、原著が欧語の場合と日本語の場合に分けて、基本的な事項を示す。

3.1 本文中における文献の引用

3.1.1 文章中に引用するとき

(1) 著者が1人のとき

Baddeley (2000), 下條 (1996)

ただし、同一のパラグラフ内では、他の文献と混同されるおそれがない限り、2度目の引用から刊行年を省略してもよい。

(2) 著者が2人のときは、両者を and およびナカグロ（・）でつなぐ。また、引用のたびに両著者の姓を書く。

Treisman and Gelade (1980)

井垣・坂上 (2003)

ただし、(1)と同様に、同じパラグラフ内で何度も繰り返すような場合には、紛らわしくない限り、Treisman と Gelade, Treisman ら；井垣と坂上, 井垣らというふうに刊行年を省略して記述してもよい。

(3) 著者が3人のときは、初出の場合全著者の姓を書く。and, ナカグロ（・）を用いる。

Raymond, Shapiro, and Arnell (1992)

南風原・市川・下山 (2001)

2度目以降は、第2著者以下の姓を省略し、et al., らを用いる。

Raymond et al. (1992)

南風原ら (2001)

上記(1), (2)と同様の理由で、刊行年を省略するときには、Raymond ら, 南風原らと記述する。

(4) 著者が4人以上のときは、初出の場合から、第2著者以下の姓は省略して、et al., らで表す。刊行年を省略するときには、上記(3)にならう。

3. 1. 2 文章後に引用するとき

- (1) 著者が 1 人のとき

(Roediger, 1990), (高木, 2000)

- (2) 著者が 2 人のときは, 両者を & およびナカグロ (・) でつなぎ, 引用のたびに両著者の姓を書く。

(Lave & Wenger, 1991)

(水原・石田, 1998)

- (3) 著者が 3 人のときは, 初出の場合全著者の姓を書く。&, ナカグロ (・) を用いる。

(Nelson, Hampton, & Shaw, 1993)

(巖島・仲・原, 2003)

2 度目以降は, 第 2 著者以下の姓は省略し, et al. および ら を用いる。

(Nelson et al., 1993)

(巖島ら, 2003)

- (4) 著者が 4 人以上のときは, 初出の場合から第 2 著者以下の姓を省略し, et al. および ら を用いる。

3. 1. 3 複数の文献を引用するとき

文章後に引用するときは, 引用文献欄の配列順にならう。刊行年の順ではないことに留意されたい。印刷中の文献は, in press, 印刷中と書き, 最後におく。

なお, 文章中に引用するときは, 必要に応じて刊行年の順にあげることができる。

(Hobson, 1986a, 1986b, 1993, in press)

(Ames, 1992; Maehr & Anderman, 1993; Patrick et al., 2001)

(藤田, 1996; Graf & Komatsu, 1994; Komatsu, Graf, & Utti, 1995; 岡田, 1994)

3. 1. 4 その他の注意点

複数の著者による文献の第 2 著者以下を省略して et al. および ら にした場合, 第 1 著者のみでは同じ表記になるときは, 区別できるまで, 第 2 著者以下の姓を書く。

4. 2. 3 の例 2 を引用した場合は, 次のように表記する。

(O'Doherty, Kringelbach, et al., 2001; O'Doherty, Rolls, et al., 2001)

3. 2 文章の引用

文献の記述の一部を引用する場合は, 必ず当該ページを示しておく。引用文は原著に正確に従うこと。原著が日本語のときには, 引用文に「 」をつけ, 欧語の引用文は“ ”内に入れて, その後の () 内にページを入れる。

“There is no conscious perception without attention.” (Mack & Rock, 1998, p. 14)

池田 (1994) は, (中略)「船が他の乗り物に比べて酔いやすいのは, 人間が最も気持ちの悪くなりやすい周期で船が揺れることが多いからである」(p.142) と述べている。

3.3 図表の引用

2.9.5 参照。

4. 引用文献（付録3参照）

4.1 一般的注意

4.1.1 引用文献は、著者名、刊行年（カッコに入れる）、表題、その他の順に記載する。

4.1.2 雑誌の場合は誌名、巻、ページ、書籍の場合は出版社名（所在地：名前の順）、さらに、編集本等でその一部を引用した場合は該当ページを示す。出版社所在地は、よく知られている都市名のときには不要であるが、あまり知られていない場合、また他の都市と混同され得る場合には、州名（あるいは国名）をともに記す。

4.1.3 各文献の行間、余白は充分にとり、読みやすいよう努める。

4.1.4 書名、雑誌名と巻数には下線を入れ、イタリックであることを明示する。

4.1.5 引用された文献については、本文中の引用と文献リストのそれとの綴りや年度が食い違っていないかどうか、また該当する論文の所載ページが正しいかどうか等に注意し、正確で完全な文献リストの作成に努めること。

4.2 配列

4.2.1 引用文献は、本文の終わりに著者の姓のアルファベット順に配列し、同一著者では年次順、さらに、同年の場合には表題のアルファベット順に配列し、1990a, 1990b のようにして区別する。印刷中の文献の場合は、刊行年の位置に *in press*, 印刷中と記入する。

4.2.2 共著の場合には、第1著者の姓によりアルファベット順に並べ、第2著者以下も同様である。

4.2.3 同一著者の文献がいくつかある場合や、同一配列の著者による共著の文献が複数にある場合は、刊行の年次順に配列し、同一年次ときは a, b をつけて区別する（以上、例1参照）。著者のメンバーに違いがある場合には、同じ刊行年であっても、a, b を使わない（例2参照）。以下に例を示す。

例1

Lavie, N. (2001). Capacity limits in selective attention: Behavioral evidence and implications for neural activity. In J. Braun, C. Koch, & J. L. Davis (Eds.), *Visual attention and cortical circuits* (pp. 49-68). Cambridge, MA: MIT Press.

Luck, S. J. (1995). Multiple mechanisms of visual-spatial attention: recent evidence from human electrophysiology. *Behavioural Brain Research*, *71*, 113-123.

Luck, S. J., & Ford, M. A. (1998). On the role of selective attention in visual

perception. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 95, 825-830.

Luck, S. J., & Hillyard, S. A. (1994a). Electrophysiological correlates of feature analysis during visual search. *Psychophysiology*, 31, 291-308.

Luck, S. J., & Hillyard, S. A. (1994b). Spatial filtering during visual search: Evidence from human electrophysiology. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 20, 1000-1014.

Luck, S. J., Woodman, G. F., & Vogel, E. K. (2000). Event-related potential studies of attention. *Trends in Cognitive Sciences*, 4, 432-440.

例 2

O'Doherty, J., Kringelbach, M. L., Rolls, E. T., Hornak, J., & Andrews, C. (2001). Abstract reward and punishment representations in the human orbitofrontal cortex. *Nature Neuroscience*, 4, 95-102.

O'Doherty, J., Rolls, E.T., Francis, S., Bowtell, R., & McGlone, F. (2001). Representation of pleasant and aversive taste in the human brain. *Journal of Neurophysiology*, 85, 1315-1321.

4.3 引用文献リスト記載例

以下に、引用文献リストの記載例をいくつか示す。レポート類、学会やシンポジウムの記録、未公刊の著作等の詳細については、APAのPublication Manualを参照のこと。

4.3.1 定期刊行物（雑誌・紀要・年報など）の場合

Gilbert, D. T., & Jones, E. E. (1986). Perceiver-induced constraint: Interpretations of self-generated reality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 269-280.

永井淳一・横澤一彦（2001）負のプライミング—現象の合目的性と生起メカニズム—
心理学評論, 44, 289-306.

西崎友規子（印刷中）ワーキングメモリ容量におよぼす二重課題の効果 基礎心理学研究.

Rotter J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (1, Whole No. 609), 1-28.

桜井茂男（1988）大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, 37, 149-153.

佐藤 徳・安田朝子・吉村 聡（1998）Marlowe-Crowne 尺度日本語版の作成と尺度の

意味について 早稲田心理学年報, 30, 9-18.

4. 3. 2 単行本の場合

Kuhn, D. (1991). *The skills of argument*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

正高信男 (1993) 0 歳児が言葉を獲得するとき 中央公論社.

4. 3. 3 編集本の場合

Buckingham, J. C., Gillies, G. E., & Cowell, A.-M. (Eds.). (1997). *Stress, stress hormones and the immune system*. Chichester, UK: Wiley.

佐伯 胖 (編) (1982) 認知心理学講座 3 推論と理解 東京大学出版会.

Urduan, T. C. (1997). Achievement goal theory: Past results, future directions. In M. L. Maehr & P. R. Pintrich (Eds.), *Advances in motivation and achievement: Vol. 10* (pp. 99-141). Greenwich, CT: JAI Press.

Williams, B. A. (1988). Reinforcement, choice, and response strength. In R. C. Atkinson, R. J. Herrnstein, G. Lindzey, & R. D. Luce (Eds.), *Stevens' handbook of experimental psychology: Vol. 2. Learning and cognition* (2nd ed., pp. 167-244). New York: Wiley.

4. 3. 4 翻訳本の場合

Astington, J. W. (1993). *The child's discovery of the mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 松村暢隆 (訳) (1995) 子供はどのように心を発見するか——心の理論の発達心理学 新曜社.

de Waal, F. (1982). *Chimpanzee politics: Power and sex among apes*. London: Cape. 西田利貞 (訳) (1994) 政治をするサル 平凡社.

4. 3. 5 その他

今井四郎 (2000) 幾何学的錯視 日本心理学会第 64 回大会発表論文集, 363.

MacCallum, J. (2000, May). *Student motivation in school context*. Paper presented at the 7th Workshop on Achievement and Task Motivation, University of Leuven, Belgium.

投稿から掲載まで

1. 一般投稿の際は、論文原稿（図表を含む）他を全て PDF ファイルに変換し、それらを添付したメールを心理学評論刊行会のメールアドレスに送信する。ただしこの方法が困難である場合のみ、原稿等を全てプリントアウトし、心理学評論刊行会の住所に郵送してもよい。

1.1 PDF ファイルを送信する場合（推奨）

- (1) 論文原稿（図表を含む）の PDF 2 個
うち 1 個には表題のみを入れ、著者名、所属機関名、謝辞等はいれないこと
- (2) 100～180 語の英文要約および日本語による要旨の PDF
（それぞれ 5～6 個のキーワードをつける） 2 個
うち 1 個には表題のみを入れ、著者名、所属機関名、謝辞等はいれないこと
- (3) 添付票の PDF 1 個

なお、一度に送信する PDF の合計が 10MB を越えないようにする。どうしても越える場合は 2 回以上に分けて送信すること。図は審査に耐え得るだけの鮮明さを保つこと（掲載が決定した際はあらためて印刷用のより鮮明な図を提出する）。メールの subject（件名）欄には「一般投稿（送信者の氏名）」と記載する。

1.2 プリントアウトを郵送する場合（PDF の送信が困難な場合のみ）

- (1) 論文原稿（図表を含む） 4 部
うち 2 部には表題のみを入れ、著者名、所属機関名、謝辞等はいれないこと
- (2) 100～180 語の英文要約、および日本語による要旨
（それぞれ 5～6 個のキーワードをつける） 4 部
うち 2 部には表題のみを入れ、著者名、所属機関名、謝辞等はいれないこと
- (3) 添付票 2 部

2. 論文原稿は、表題のあるページを第 1 ページにし、以下、英文要約、日本語による要旨、本文、引用文献、脚注、図表およびその表題・説明、付録の順に重ねる。本文および引用文献には通しページ番号をつけておく。投稿にあたっては、原稿に必ず添付票（付録 4 参照）を添えておくこと。
3. 投稿論文を事務局で受け取った日をもって受稿年月日とし、著者に連絡される。その後編集委員会で審査者が決定され、審査過程に入る。審査者、編集委員の判定を受けて、初回審査結果が著者に通知される。
4. 改稿が求められた場合は、審査者のコメントを尊重し、また、改稿部分が明確に示されている新旧対照表をつけて再度提出する。再提出された論文は再審査され、その結果掲載が可となれば、その旨を著者に連絡し、その日を受理年月日とする。なお、再々審査されることもある。

5. 受理の通知と同時に、PDF による投稿、郵送による投稿のいずれの場合でも、本文のファイル（ワード）とプリントアウト、および鮮明な図のファイル（JPEG または EPS）とプリントアウトの送付が求められる。
6. 掲載論文は、特別な場合を除いて、初校のみが著者校正となる。初校は原稿との照合を主とし、修正、改訂は最小限にとどめねばならない。再校以降は原則的に事務局が担当する。
7. 論文が掲載された場合、著者には、本誌 1 部、および抜刷 20 部を贈呈する。それ以上の部数を必要とする時は、著者の実費負担とする。また、論文の長さが 20 ページを超える場合の超過分や、カラーの図を掲載する場合も実費を自己負担とする。希望者には論文 PDF を贈呈する。
8. 投稿原稿の送り先、その他、問い合わせ等は、下記まで。

心 理 学 評 論 刊 行 会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部心理学研究室内

TEL: 075-753-2753 (2861)

FAX: 075-753-2835

E-mail: hyoron@psy.bun.kyoto-u.ac.jp

URL: <http://www.sjpr.jp/>

付録 1. アブストラクト見本

原稿は 1 行おきに, 12 ポ以上の大きさに印字のこと。

Reinforcement learning:

The brain mechanism and emotional control

Wako YOSHIDA and Shin ISHII

Nara Institute of Science and Technology

Selecting appropriate behaviors in a complicated environment is crucial for animals like humans to survive. Conditioning models, such as the Rescorla-Wagner model, successfully explained how animals make prediction about rewards and use the prediction to control their behaviors. However, those models often ignored effects of future rewards. The estimation of rewards accumulated toward the future are important for acquiring the optimal behavior sequence; reinforcement learning (RL) can deal with this problem, and recent physiological studies have revealed that the real brain seems to realize an RL-like learning scheme. Animals' behaviors are controlled not only by external rewards but also by internal emotions. Recently, it has also been suggested that meta-parameters used in the machine-learning RL may correspond to neuromodulators that regulate emotional states in the brain. In this article, we introduce the RL, the formulation and the relation with conditioning, and discuss emotional effects on the RL, the behavioral control based on selective attention and its neural mechanism.

Key words: conditioning, reinforcement learning, selective attention, novelty, neuromodulators

(吉田和子・石井 信 (2004) 強化学習の脳内機構と情動による制御心理学評論, 47, 150.より)

1. はじめに

洞察は、人間の創造的認知をもっともよく体現する心理現象の 1 つである。この現象は Gestalt 心理学によってはじめて体系的に取り上げられたが、現象の再現可能性や、分析方法などが十分に発達していなかったため、その後の行動主義においても、また 80 年代までの認知心理学においても十分な形で研究されることはなかった。

しかしながら、90 年代にはいると Sternberg や Finke らのグループを中心にして、洞察やその他の創造的認知の研究は科学的な探求の対象として多くの研究者の注目を集めることになった (Finke, Ward, & Smith, 1992; Smith, Ward, & Finke, 1995; Sternberg & Davidson, 1995; Ward, Smith, & Vaid, 1997)。

本研究では洞察問題解決の研究動向を概観し、洞察の理論の構築のための要件を明らかにする。そしてここで明らかにされた要件を満たすべく提案された制約の動的緩和理論に基づく研究の展開を報告する。そして、今後この分野における研究の方向について検討する。

2. 洞察問題の性質と解決の特徴

洞察研究では非定型的な解法が必要とされる問題が用いられる。

これらの問題は、通常の解法では解決することができないため、問

まず、仮定される情報蓄積機構の性質からランダムウォークモデルとカウンタ・モデルという 2 つのクラスに大別可能である。前者は情報蓄積が基本的に 1 つ (の見本関数) として表現され、後者は選択肢に対応した数だけある。またこれらのクラスについて各々、時間・(状態)空間が離散的あるいは連続的であるかにより 4 つのパターンに区分される。

以上、モデルは 8 つのクラスに分類可能である (表 1)。次の節からは、この分類に従い主要なモデルについて取り上げて行くことにする。(以下省略)

表 1

2. カウンタ・モデル

逐次抽出モデルの主要なクラスであるカウンタ・モデル (あるいは、計数モデル) は、選択課題における反応時間・反応率を予測するモデルである。カウンタ・モデルは、刺激の種類あるいは反応選択肢の数に応じて心内のカウンタ (counter : 計数器もしくは情報蓄積機構) がそれぞれ独立に、情報蓄積を行うと仮定する。すなわち、刺激提示と同時に各反応 (たとえば、A と B) に対応したカウンタが作動を開始、情報が蓄積され、先に閾値 C に達したカウンタの方を反応とする (図 1)。この過程を、stage モデルの観点から見ると、複数のカウンタ (= 反応選択肢) による並列自動打ち切りのレースモデルということになる。

図 1

付録 3. 引用文献見本

文 献

- Ames, C. (1992). Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84, 261-271.
- Atkinson, W. (1957). Motivational determinants of risk taking behavior. *Psychological Review*, 64, 359-372.
- Bandura, A. (1989). Self-regulation of motivation and action through internal standards and goal systems. In L. A. Pervin (Ed.), *Goal concepts in personality and social psychology* (pp. 19-85). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bandura, A., & Cervone, D. (1983). Self-evaluative and self-efficacy mechanisms governing the motivational effects of goal systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 191-215.
- Barsalou, L. W. (1984). A hoc categories. *Memory & Cognition*, 11, 211-227.
- Bloom, B. S. (1956). *Taxonomy of educational objectives*. New York: Longman.
- 平田謙次・中西晶（1999）自己決定感を高める多目標解釈過程 産業・組織心理学会第15回発表論文集, 60-63.
- Hughes, C. L. (1965). *Goal setting*. New York: American Management Association. 小野豊明・戸田忠一（訳）（1966）目標設定 ダイヤモンド社.
- 鹿毛雅弘（1996）内発的動機づけと教育評価 風間書房.
- Krahe, B. (1992). *Personality and social psychology: Towards a synthesis*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Locke, E. A., Shaw, K. N., Saari, L. M., & Latham, G. P. (1981). Goal setting and task performance. *Psychological Bulletin*, 90, 125-152.

添付票 (投稿論文)

- (1) 表題：日本語：
英語：
- (2) 欄外略題（著者の姓を含めて20字以内が望ましい。）：
- (3) 著者名： (ローマ字表記：)
- (4) 出身学校： 年 大学 学部卒業
年 大学大学院 研究科修士課程
年 大学大学院 研究科博士課程
- (5) 所属機関：機関名：
英語表記：
職名・身分：
所在地：〒

電話： FAX：
E-mail：
- (6) 現住所：〒
電話： (携帯電話：) FAX：
E-mail：
- (7) 連絡先の指定： 所属機関 現住所
- (8) 原稿枚数： 枚
- (9) 図： 個 (カラー図がある場合はその図番号)，表： 個，付録： 個
- (10) 脚注： 個
- (11) 引用文献： 個
- (12) 英文要約 (100～180語)： 語，日本語による要旨： 枚
- (13) **Key words**：
キーワード：
- (14) 論文の分野：
- (15) 論文 (最初の論文) 送付日： 年 月 日
- (16) 使用ワープロ：OS (該当するものに○をつけ名称を記入)
Windows ()
Mac ()
ワープロ
名称： バージョン：

注：著者が複数の場合は，(3)，(4)，(5)，(6) はすべてについてご記入ください。

投稿・執筆の規定 (2013年改訂)

編集・発行

心理学評論刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部心理学研究室内

TEL: 075-753-2753 (2861)

FAX: 075-753-2835

E-mail: hyoron@psy.bun.kyoto-u.ac.jp

URL: <http://www.sjpr.jp/>
